

多発性骨髄腫研究助成 2020 年度研究課題選考会総括

本研究助成事業は、骨髄腫患者さんとそのご家族、そして日本骨髄腫患者の会の活動を応援していただいている多くの方々のご厚意とご寄付により成り立っています。2002 年度に始まり、本年度は第 19 回研究助成となります。骨髄腫診療に携わる医師や研究者にとって、最も名誉ある研究助成の一つとなっています。今年度も審査員一同、「将来の骨髄腫患者さんのお役に立てる研究は何か」という視点で選考させていただきました。審査過程においては、上甲恭子さんをはじめ日本骨髄腫患者の会の皆様や会員オブザーバーの方にもご参加をお願いし、患者さん目線でのご意見もいただきました。

審査委員会では、応募課題 13 題について研究の「重要性」「計画・方法の妥当性」「独創性」「波及効果」「遂行能力・研究環境」の 5 つの評価項目及び総合評価について、5 名の選考委員により一次選考を行っていただきました。今回も情熱のこもった優れた課題ばかりで、COVID-19 禍にありながらもメーリングリスト上で熱い議論を繰り返し、最終的に本研究助成の趣旨に叶う研究 2 課題を採択させていただきました。

採択した課題は以下のとおりです。

2020 年度多発性骨髄腫研究助成 助成額 100 万円

国立がん研究センター研究所 細胞情報学 山本 雄介 先生

「エクソソームを介した骨髄腫の免疫調節薬に対する耐性化分子機序の解明」

大阪大学大学院医学系研究科 血液・腫瘍内科 一井 倫子 先生

「多発性骨髄腫における Signal transducing adaptor protein ファミリーの役割」

今回の 2 課題は、骨髄腫細胞が骨髄内（骨髄微小環境と呼びます）を自らに都合のよい環境に作り上げる手段として用いているエクソソームという情報伝達物質（山本先生）や、炎症や細胞間の情報交換に関与する分泌蛋白を制御している STAP という細胞内蛋白質（一井先生）の役割を検討して、骨髄腫細胞が免疫系から逃れて骨髄微小環境内で増殖し続けるメカニズムや薬剤耐性機序を明らかにしようという研究です。しっかりした研究基盤ができれば、既存の薬剤とは作用機序の異なる新たな治療法の開発につながる可能性が期待されている受賞となりました。

病態研究、治療研究を問わず、日夜奮闘されておられる諸先生から今後も本研究助成事業に多数の応募があり、研究成果が患者のみなさまに還元されることを祈っております。

2020 年 5 月

日本骨髄腫患者の会 多発性骨髄腫研究助成 選考委員会委員長

飯田 真介